

# 平成24年度沖縄群島病害虫発生予報第3号(6月予報)

## I 6月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	40	40	30
平 年 並	30	30	30
低い(少ない)	30	30	40

(平成24年5月25日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	26.8	29.4	24.8	247.2	163.6

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

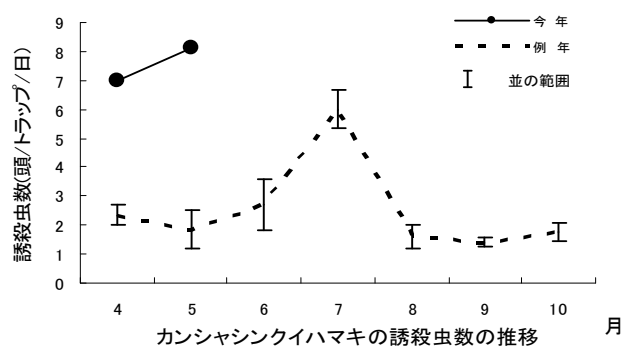
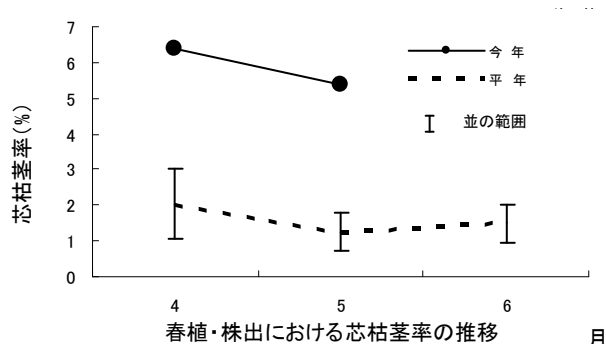
## 1 さとうきび

### (1) カンシャシンクイハマキ

発生程度 : 多

予報の根拠

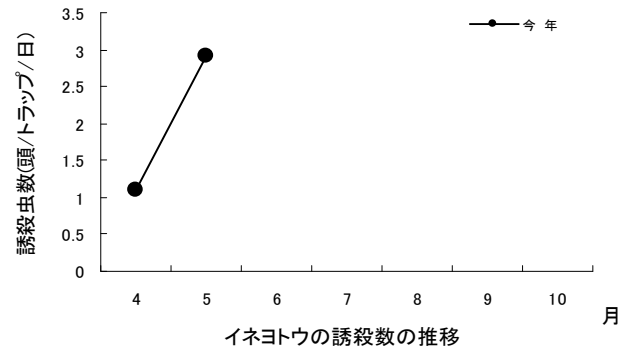
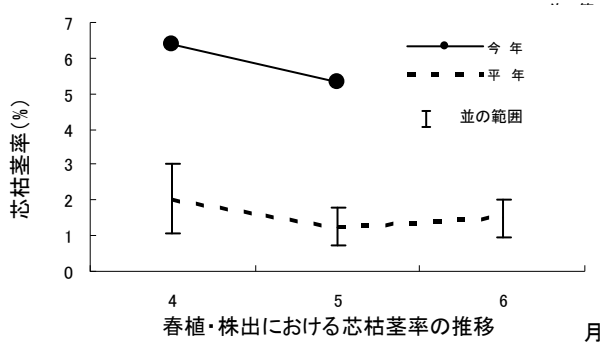
- a 5月下旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は5.4%(前年3.9%、平年1.2%)と平年より高かった。
- b 5月のカンシャシンクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は8.1頭(前年1.0頭、平年5.5頭)と例年より多かった。



<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- e 平成24年度病害虫発生予察技術情報第1号参照(平成24年4月5日付)。

- イネヨトウの防除対策
  - a 5月下旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は5.4%(前年3.9%、平年1.2%)と平年より高かった。
  - b 5月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は2.9頭であった。
  - c 与那国島において、イネヨトウの被害が多発した際の誘殺虫数は2頭以上であった。



<防除上注意すべき事項>

カンシャシクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。

## 2 マンゴー

- 炭疽病の防除対策
  - a 5月下旬の調査の結果、一部園地で発生がみられた。
  - b 罹病した葉や枝、摘果した果実等は施設外へ持ち出し処分する。
  - c 収穫果実への被害軽減のため、袋がけ前までの防除を徹底する。
  - d 果実肥大～成熟期は、治療剤を選定し、定期防除に努める。
- チャノキイロアザミウマの防除対策
  - a 5月下旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.1頭(前年0.1頭未満、平年0.3頭)と平年よりやや少なかった。
  - b 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘除する。
  - c 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- ハダニ類の防除対策
  - a 5月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.2頭(前年0.2頭、平年0.1頭未満)と平年より多かった。
  - b 主に発生していた種はシュレイツメハダニであった。
  - c 袋がけを行う前の防除を徹底する。

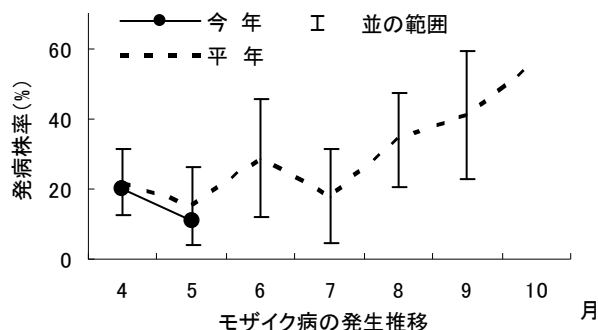
### 3 へちま

#### (1) モザイク病

発生程度 : 並

予報の根拠

5月下旬の調査の結果、発病株率は10.9% (平年15.2%)と平年並であった。



#### <防除上注意すべき事項>

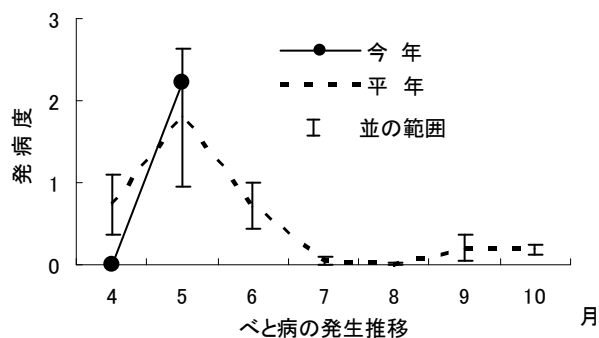
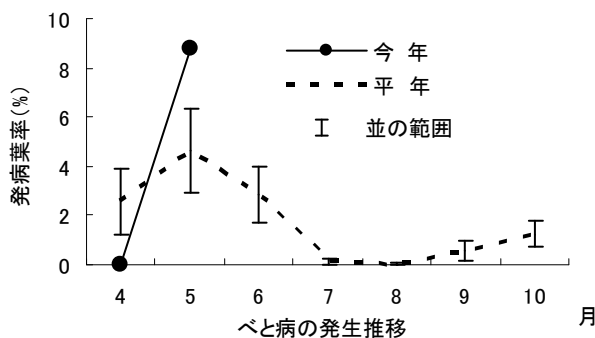
- 本病の媒介虫であるアブラムシ類の防除を徹底する。
- 圃場内外の雑草はアブラムシ類の発生源となるので、除草する。
- 育苗は専用施設で行い、定植時の苗による本病および媒介虫の圃場への持ち込みを防止する。
- 育苗施設の開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネット等を張り、媒介虫の飛来侵入を防止する。特に、出入口については2重に被覆する。
- 防風をかねて圃場周辺をネット等で囲う。
- シルバーポリテープ等を利用して媒介虫の飛来を防止する。
- 本病は汁液伝染するので、ハサミや手および農機具の消毒・洗浄を行う。
- 発病株は発生源になるので、見つけしだい抜き取り、処分する。
- 栽培時の摘葉および老葉などは本種の発生源になるので、露出状態で運搬すると圃場内にかえって拡散してしまうので、圃場内に放置せず、ビニール袋に入れるなどして密閉し、圃場外に持ち出し処分する。

#### (2) ベと病

発生程度 : やや多

a 5月下旬の調査の結果、発病葉率は8.8% (前年8.8%、平年4.7%)、発病度は2.2 (前年1.9、平年1.3)と、ともに平年よりやや高かった。

b 本病は多湿条件下で発生しやすい。気象予報によると向こう1か月の降水量は多い確率が40%と予想されており、発生はやや多のまま推移すると考えられる。



#### <防除上注意すべき事項>

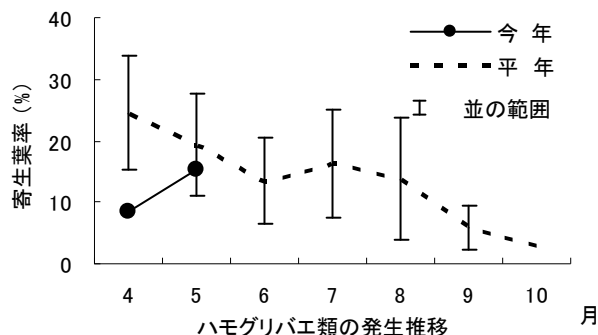
- 支柱その他の資材の消毒を行う。
- 育苗施設では換気を十分に行い、多湿にしない。
- 雨滴等による病原菌の跳ね上りを防止するため、敷草またはビニールマルチを行う。
- ハモグリバエ類幼虫の食害痕等から病原菌が侵入しやすいので同虫の防除にも努める。
- 病徴がみられたら、治療剤を葉の表裏ともに掛け残しがないよう丁寧に散布する。

### (3) ハモグリバエ類

発生程度：並

予報の根拠

- a 5月下旬の調査の結果、寄生葉率は15.3%（前年0.6%、平年19.3%）と平年並であった。
- b 気象予報によると向こう1か月の気温は高い確率が40%と予想されており、発生は並のまま推移すると考えられる。



#### <防除上注意すべき事項>

- a 圃場内外のウリ科・ナス科・マメ科などの雑草は発生源になることから、除去する。
- b 育苗は専用施設で行い、定植時の苗による本虫の圃場への持ち込みを防止する。
- d 育苗施設の開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネット等を張り、媒介虫の飛来侵入を防止する。特に、出入口については2重に被覆する。
- e 幼虫期間が比較的に短いため、葉の表面に産卵痕や食害痕がみられたら防除を開始する。
- f 農薬やその他の防除資材の効果の判定は幼虫の体色で判定する。生存時の幼虫の体色は黄色で、死亡すると黒変する。
- h 本虫の脱出口などの傷はべと病菌などの侵入口となることから、同病の防除にも努める。
- i 栽培時の摘葉および老葉などは本種の発生源になるが、露出状態で運搬すると圃場内にかえって拡散してしまうので、圃場内に放置せず、ビニール袋に入れるなどして密閉し、圃場外に持ち出し処分する。

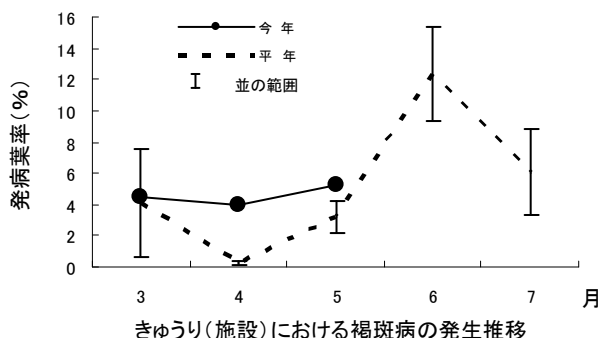
## 4 きゅうり(施設)

### (1) 褐斑病

発生程度：やや多

予報の根拠

5月下旬の調査の結果、発病葉率は5.2%（前年3.7%、平年3.2%）と平年よりやや高かった。



#### <防除上注意すべき事項>

- a 多湿条件下で発生が多くなることから、晴天の日中は施設内の換気を良好にする。
- b 下葉の老葉を早めに除去し、圃場外に持ち出し処分する。

○ ミナミキイロアザミウマの防除対策

- a 5月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.33頭(前年0.74頭、平年0.82頭)と平年よりやや少なかった。
- b 今後、気温の上昇に伴い、本種の発生が助長される。
- c ミナミキイロアザミウマは灰白色斑紋病や黄化えそ病の媒介虫である。
- d 施設周辺の雑草は発生源となるので除草を行う。
- e 摘葉等による残渣は本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。

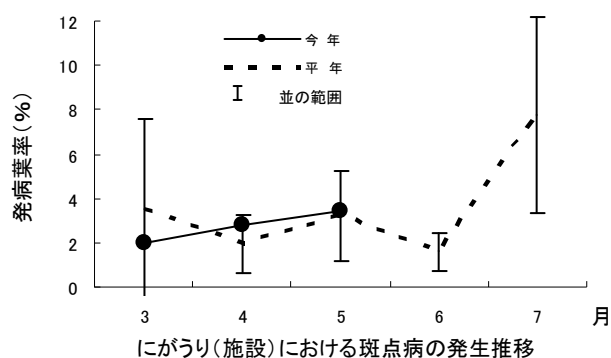
## 5 にかうり(施設)

(1) 斑点病

発生程度 : 並

予報の根拠

5月下旬の調査の結果、発病葉率は3.4%(前年10.3%、平年3.2%)と平年並であった。



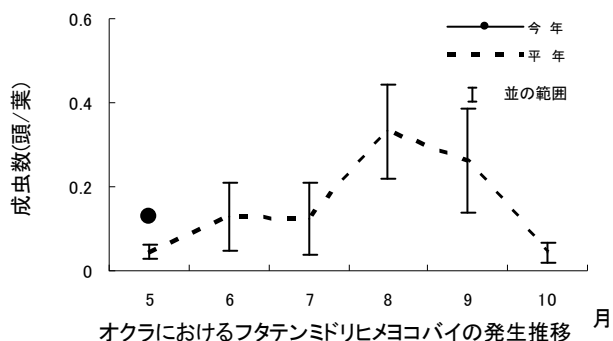
<防除上注意すべき事項>

- a 老葉や病葉は発生源になるので除去し、圃場外に持ち出して処分する。
- b 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- c 急激に症状が拡大するので中～下位葉をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。

## 6 オクラ

- (1) フタテンミドリヒメヨコバイ  
発生程度 : 多  
予報の根拠

- a 5月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭(平年0.1頭未満)と平年より多かった。  
b 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並または高い確率が40%であり、本種の発生が助長されやすいと考えられる。  
c 平年の発生推移を見ると、今後増加傾向にある。



### <防除上注意すべき事項>

- a 多発すると吸汁加害により葉の萎縮や黄化が進み生長が阻害されるため、葉裏をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。  
b 発生源となる圃場周辺の雑草を除去する。

### ○ ハスモンヨトウの防除対策

- a 5月下旬の調査の結果、葉当たり幼虫数は0.1頭未満(前年0.1頭未満、平年0.1頭未満)であった。  
b 気象予報によると、向こう1か月の気温が高い確率が40%であり、本種の発生が助長されやすいと考えられる。  
c 圃場周辺の雑草は発生源となるので除草を行う。  
d 中齢以降の幼虫は薬剤の効果が高いことから、若齢期の段階で防除を徹底する。  
e 若齢期の幼虫は葉裏に多いので、薬剤は葉裏にも十分かかるよう散布する。